

目次

瞬時をうつすフィロソフィー——文化学の挑戦——	出光佐千子	3
第1部 東西のエクリチュール		
食事の情景——西洋美術における飲食の主題——	宮下規久朗	17
中華民国期の絵画における「風俗」へのまなざし	呉孟晋	41
近代日本画肖像考——観山筆岡倉天心像の周辺——	中野慎之	75
第2部 美のメディア		
幕末風刺画の中の役者評判絵	倉橋正恵	109
上方役者絵における中判普及の背景——画帖仕立てとの関連性——	中野志保	135
円山派の美人画の展開—— ——応挙・素絢・南岳の美人画と同時代の美人表現との関係に注目して——	宮崎もも	165
出光美術館蔵「桜下弾弦図」をめぐるいくつかの問題	館野まりみ	191

第3部 演出のメカニズム

『古今和歌集』注釈にみる秘説の視覚性……………松本郁代……………215

——見立てと時空間の構成をめぐって——

「打出」——女房装束による美の演出とその歴史の変遷……………吉住恭子……………241

「吉祥画」としての四季耕作図——狩野永岳筆《四季耕作図屏風》を中心に……………松本直子……………279

第4部 信仰のプラットホーム

狩野元信「釈迦堂縁起絵巻」（清凉寺）の制作をめぐって……………森 道彦……………315

四天王寺図についての覚書

——「一遍聖絵」、掛幅本「聖徳太子伝絵」をめぐって……………米倉迪夫……………359

サントリー美術館蔵「日吉山王祭礼図屏風」に見る中世の日吉祭……………下坂 守……………383

あとがき

英文目次

執筆者紹介

論文集第三冊目を出版するにあたって、「瞬時をうつすフィロソフィー」という副タイトルを付すこととした。その理由として、風俗絵画として描かれている主題は、あくまで事象の瞬間の姿かたちであるという、至極当たり前でありながら、極めて重要な視点に改めて気づかされたからである。

なぜ、このような〈かたち〉に描かれたのか——研究会のメンバー同士で会話を重ねる中で、私たちは、その〈かたち〉が内包する過去と未来を結ぶ時空間を、知らず知らずのうちに往還しながら、その時代に生きた人々しか抱くことができなかった、特殊な観念の枠組みを捉え直そうとしてきた。そして、研究会の回数を重ねるごとに私たちの関心は、描かれた事象の歴史的な実証に留まらず、描かれた事象に織り交ざる虚実を読み解くことで、鑑賞されることを意識した美的な演出や、儀礼や慣習から生じた絵の上での約束事や仕掛け、信仰のイメージや地域に根ざした特殊な世界観などといった、人間の営為そのものの原理を探究する、哲学的思考（フィロソフィー）へと解釈が広がっていった。

風俗絵画には、人々の機知、すなわち、その時々々の状況に応じた機微や、社会の視線が映し出されている。しかし、それだけではなく、時には、描きたいという画家個人の衝動的欲求や、約束事として愚直なまでに描き継がれていくうちに意味が希薄となってしまった不可解な描写などからも、当時の人々の声や息づかいが生彩に聞

こえてくるのである。

本書では、そうした、社会という外側からの視線だけでは読み解けない、画家集団や作者個人の意図や欲求といった人間の心の動きや本来の性質にも注目したことで、個々の作品に秘められた情熱や制作された状況に、より迫っていくことができたように思われる。不可解な描写が様々な憶測を呼び、様々な解釈が生み出される。正解の核心まではたどり着けないと分かっている、それぞれの解釈の過程の面白さにはまり込んでいくのである。つまり、「文化学上の挑戦」とは、「解釈」という正解のない文化理解と対峙する、私たちの挑戦でもある。

では、第二論文集の「虚実をうつす機知」からさらにいっそう、思索の翼を広げて、本書に展開されるフィロソフィーの世界へと入っていこう。本書では、研究会の議論の中で度々登場した、「東西」・「美」・「メディア」・「演出」・「信仰」という五つのキーワードをもとに、風俗絵画の多義的な解釈の可能性を提示した。

※

※

※

第1部「東西のエクリチュール」とは、地域によって描かれてきた風俗絵画の主題の特色と、その主題が好まれ、あるいは避けられてきた理由を読み解くことによって、東西における社会の価値観の違いを導き出す方法である。それぞれの社会で風俗絵画は、どのような価値観から派生してきたのであろうか。第1部には、中世ヨーロッパと近代中国・近代日本における風俗絵画の成立状況を扱った三本の論文を収録した。

宮下規久朗論文「食事の情景——西洋美術における飲食の主題——」では、西洋絵画では飲食を主題としたものが多いが、東洋ではほとんど見られない理由に、キリスト教の「最後の晩餐」という主題があったことが示されている。食事は「聖餐」に結びつく神聖な意味を持ち、食欲に駆られて貪り食う「大食」は罪とされ、「よき食事」と「悪しき食事」とが区別されてきた。十七世紀に、農民の生活を描いた風俗絵画に近いジャンルが成立

した背景にも、「よき食事」をとろうと願う庶民の信仰心の表れが認められると分析する。

呉孟晋論文「中華民国期の絵画における「風俗」へのまなざし」では、中国社会の規範の中で、風俗絵画を享受した鑑賞者に着目する。中国と、日本や西洋が異なるのは、風俗絵画の名品を享受できた層が宮廷や文人社会などである点を挙げ、庶民が展覧会やメディアの流通により風俗絵画を享受できるようになった二十世紀前半に、伝統的な文脈を離れて登場してきた風俗絵画の主題・表現・制作意図を分析する。中華民国期にあっても、画家たちが意識したのは、「まなざし」すなわち、作品がどの社会層の眼にふれるかであり、さらに、主題の直接的な描写を避けた「風俗」という表象形態によって、政治的な立場を異にする鑑賞者にも多義的な解釈を提示することができるように、画家が独自の表現を探究し、清新な画風を展開してきたことを新たに指摘する。

近代日本の肖像画の問題を扱った中野慎之論文「近代日本画肖像考——観山筆岡倉天心像の周辺——」では、西洋では風俗画の重要な主題であった肖像画が、日本画の概念が成立した当初、日本画とは馴染まない洋画の領分であるという認識があったこと、肖像画の「純東洋式」での表現方法の可能性を主張したひとりが天心岡倉寛三であったことに注目する。そして、下村観山による渡辺崋山の肖像画学習の意義、すなわち、東洋画における人格的相似性と西洋画における外面的相似性との融和表現の学習などを明らかにし、作品の詳細な比較分析から「岡倉天心像」の日本絵画史における史的な位置づけを行っている。さらに、それまで重視されてきた画賛が近代肖像画に失われてしまった背景に、像主の人物像を表徴する姿態・持物・着衣・調度等が加えられていくという、いわゆる風俗画の画面構成が肖像画の規範となった可能性を提示している。

洋の東西を問わず、風俗絵画は、特殊な社会秩序観に従って派生してきた。それは、人々の信仰や、皇帝や文人社会のまなざし、日本画の概念など、地域に特有の伝統的な価値観を写し出す鏡でもあった。しかし、近代化の中で、東西の価値観が出会い伝統的な規範が揺らぐたびに、風俗絵画は新たな鑑賞者や絵画表現を獲得し、反

対に絵画が展覧会や出版などのメディアを通じて新たな社会秩序を生み出す力も備えていたのである。

美は時代によって異なる価値観をもつ。美意識や美の価値観は、時代や世相が反映された絵画というメディアによって広められる。また、特定の鑑賞者や享受者を想定した描写は、美を収める絵画の形式にも変化をもたらした。第2部「美のメディア」では、美の価値基準を社会的に作り出す装置に着目し、また、受け手が求める美を理解しようとした制作者と受け手との交流によって、新たな流行を成立させてきた美の伝達手段にも注目する。

倉橋正恵論文「幕末風刺画の中の役者評判絵」は、従来の研究史ではその存在を全く認められてこなかった「役者評判絵」をとりあげ、幕末期から明治初期にかけての風刺画史に初めて位置づけている。「役者評判絵」とは、役者の評判を画中に具象化させて風刺した役者絵を指す。役者絵の中でも特異とされるその性質を捉えるために、画中の絵とテキストの主従関係に留意して分類、展開を考察し、その発生の下地に歌川派の戯画の世相風刺のアイディアがあった点や、反対に「役者評判絵」の趣向が原点となって後世の世相風刺画へ展開していった例を発見する。その結果、「役者評判絵」は天災を扱った風刺浮世絵と政治情勢を扱った風刺浮世絵の流行の間をリンクを繋ぐ存在と確認でき、また、幕末風刺画を検討する際に考察が欠かせない重要な領域であることを新たに提言している。

中野志保論文「上方役者絵における中判普及の情景——画帖仕立てとの関連性——」は、錦絵の技法で作られる一枚絵の役者絵が、上方で大判型から中判型に変化した理由について、上方における役者絵の享受方法の変化という視点から新たな見解を主張する。判型を年次別に整理したデータから、天保の改革以前から中判が作られていたことをまず確認し、細判から大判への移行のときと同様に、中村歌右衛門の名跡が三代目から四代目に変

わったことをきつかけに新しい役者絵が模索された可能性を指摘する。さらに、中判の絵画表現・画帖装丁・一枚絵の画面形式の詳細な観察により、画帖としての鑑賞方法に最適な判型として中判が選ばれたことを新たに指摘する。そして、画帖仕立てを前提とした制作の背景には、天保の改革による空白期間を経て作画を引き継いだ新しい世代の絵師が、三代目の鼻貞による貼込帖の回覧という上方歌舞伎界での伝統に、江戸における錦絵の画帖化という流行を取り入れて普及させた可能性があることを推論する。

宮崎も論文「円山派の美人画の展開——応挙・素絢・南岳の美人画と同時代の美人表現との関係に注目して——」は、円山応挙とその門下の美人画の展開について、従来は円山派の技法内での検証にとどまっていたことに対し、新たに、同時代に流行した江戸の浮世絵美人画や他派の美人画との関係を、画風の比較検証から明らかにした論文である。まず、応挙が取り入れた中国明時代の画家・仇英の様式である細身の美人の型や、微妙に個性を加えた顔貌表現は、応挙と活躍期が重なる江戸の浮世絵師・春信や歌麿にも通じることを示す。さらに、応挙の弟子である山口素絢と渡辺南岳を取り上げ、素絢画には、同時代の浮世絵の描法が直接的に取り入れられて、応挙風に艶麗さが加味されている点や、軽快な筆致を得意とした南岳の生气溢れる表現が、十数歳年長の人気絵師・祇園井特の濃厚で生々しい表現と交差する点を新たに指摘している。

館野まりみ論文「出光美術館蔵「桜下弾弦図」をめぐるいくつかの問題」は、「桜下弾弦図」を、MOA美術館蔵「機織図」と、図様や描法について比較検討し、主題や成立状況、年代の考察など、改めて作品の史的位置づけを行った論文である。上村松園の手記をもとに、「桜下弾弦図」には同図の原本があった可能性を挙げ、その前提に立って「桜下弾弦図」と「機織図」の描写の粗密さ、主題選択の違いを確認している。さらに、今まで等閑視されてきた領域として、画中の歌や文を検討することで、「機織図」には中世歌謡調の音数律を持つ隆達節が、「桜下弾弦図」には寛永期に始まる近世歌謡調の音数律の文句が並ぶことを指摘し、両者が一双の屏風と

して制作されたものではないこと、「桜下弾弦図」がその原本とさほど遠くない時代に描かれた可能性を導き出す。このことから「機織図」を寛永期、所在不明の「桜下弾弦図」の原本を寛永期末期、「桜下弾弦図」を又兵衛風がまだ流行していた十七世紀後半の制作と結論づける。

以上の四論文は、論述の対象や視角は異なるが、各時代に、特有の享受方法や鑑賞方法によって「美」のかたちが形成され、また、「役者絵」や「美人画」という人気の主題の姿を借りて、社会風刺や艶麗な遊女という内容で享受者を喜ばす趣向が登場する点で一致している。享受者の求めに応じてさまざまに趣向を凝らしてゆく現象は、多様な「美」を内包するメディアとしての絵画といえるのではないか。

第3部「演出のメカニズム」とは、絵画が成立した仕組みを他の作品のみならず、思想や故実に照らしながら絵画の意味を解釈する見方である。絵画によって何かを演出するということは、〈かたち〉の意味そのものではなく、〈かたち〉から何かを読み取ることである。それは絵画に描かれたものを通して、当時の美意識や意図を再現することでもある。絵画と文献、絵画と絵画を比較することにより、演出の深さや、絵画が描写を超えて他の意味へと転換するメカニズムを知ることができる。第3部には、描写や表現の世界そのものが歴史的・文化的な意味をなす論を収めた。

松本郁代論文「『古今和歌集』注釈にみる秘説の視覚性——見立てと時空間の構成をめぐる——」は、『古今和歌集』卷十物名部に収められた和歌の注釈書、江戸時代写『古今相伝深秘』第一（内題「古今和歌集相伝抄深秘勘」）に掲載された「をかたまの木」に関するテキストと図像の解釈を試みたものである。本注釈書は、和歌の一流派に伝えられた秘伝書ではあるが、和歌の字句に沿った実証的な注釈ではなく、注釈の叙述と描写を通して

別次元の世界が構築されている。中世以降、和歌注釈の秘説化が進められる中、注釈書に写された一見、秘説と図像の関係が何を意味するのか解らない図像を、秘説の意味と図像のかたち、思想的背景を読み解くことによって、須弥山図を構想した図像である点を導いた。また、前近代的なテキストと図像によって構成された注釈の視覚性の問題について論じている。

吉住恭子論文「打出」——女房装束による美の演出とその歴史の変遷——は、平安時代の絵巻物や文献史料に登場する「打出」についての考察である。「打出」とは、寝殿造におけるハレの儀式に際して、御簾の下から女房装束の袖口や褌先の一部を打ち出し、その美しさを演出した状態を指す。このスタイルには、人間（女性）による演出と、人間不在の装束（もの）だけによる演出の二つが挙げられるが、これまで有職故実や服飾史研究の対象として捉えられてきたため、なぜ二つの打出の状態が混在していたのか不明であった。本論文では日記史料からその歴史の変遷をたどり、女性による美意識の表現として創出された「打出」が、次第に男性側からも晴儀の空間を演出する一要素として関心を引くようになり、ついには男性が「打出」を差配するようになるなど、様々な事例が積み重ねられながら故実化され、人間不在の装束だけによる「打出」が現れたとした。女性による「打出」も「女房出袖」や「押出」として存続し、当時の「打出」とは区別されたため、従来の「打出」の定義の再考を促している。

松本直子論文「吉祥画としての四季耕作図——狩野永岳筆《四季耕作図屏風》を中心に——」では、中国の「鑑戒画」の一種である「耕織図」が室町時代に日本に伝えられ、江戸時代に吉祥画へと意味が変化した過程を、江戸時代後期に京都で活躍した狩野永岳の「四季耕作図屏風」を手がかりに論じたものである。永岳作品の様式や図様の描法、技法の分析を通じて、「耕織図」が「四季耕作図」として吉祥画となった過程には、「耕作図」とは本来無関係な中国絵画の伝統である長寿や多産、子孫繁栄を意味する吉祥図が取り込まれ融合した結果である

とし、図様の変遷から絵画の意味を論証したものである。

以上三論文は、それぞれ描写の時代や媒体を異にするものであるが、絵画を構成する（かたち）としての描写が何を意味するのか、これらの追究によって表現やかたちに歴史や文化的役割を見いだすことができると思われる。

第4部「信仰のプラットフォーム」は、寺社に対する信仰のあり方がどのような景観の描写を生み出すか、という絵画から読み取る信仰のバリエーションを問題とする。寺社の景観を読み解くことは、戦乱後の復興や勧進活動、寺社を描く工房や画家集団、祭礼そのものの変容など、寺社の背景に広がる歴史や信仰のあり方、制作者や制作の意図を導くことである。

森道彦論文「狩野元信「釈迦堂縁起絵巻」（清涼寺）の制作をめぐって」は、永正十二年（一五一五）頃に成立した狩野元信「釈迦堂縁起絵巻」（清涼寺）のテキストと表象の分析を通じて、本絵巻が応仁・文明の乱後における清涼寺本尊の移座・洛中流浪・帰座に至るプロセスと、それをとりまいた勧進集団や特定の信者組織を記録・顕彰したものである点を導き、寺社縁起絵巻としての意義を論じたものである。特に、清涼寺境内に生身像であり信仰の中心とされた本尊を納入するシーンで締めくくられている場面を、平安前期の清涼寺創建と本尊迎接という物語場面と、多くの参詣者が集う中で本尊が帰還納入されるという文明九年の現実光景との、ダブル・イメージとして捉えている。

米倉迪夫論文「四天王寺図についての覚書——『一遍聖絵』、掛幅本『聖徳太子伝絵』をめぐって——」は、『一遍聖絵』と掛幅本『聖徳太子伝絵』に描かれた「四天王寺図」の景観図の分析を通じ、それぞれの景観図の

性質から四天王絵所との関係を示唆した論である。『一遍聖絵』は、制作した絵師達が極めて正確な知識を持ち合わせ描いたことが判明する景観図であるのに対して、『聖徳太子伝絵』は、四天王寺のシンボリックな場所がほとんど定型化された景観図であり、本證寺本や妙源寺旧蔵本など制作年代に差がある異本であっても、それぞれの第一幅の画面の図様がほぼ同一であることから、伝記絵制作や太子伝図様の管理に関して共通するシステムがあった可能性を示唆するとし、四天王寺周辺における中世絵画の工房のありようを論じている。

下坂守論文「サントリー美術館蔵「日吉山王祭礼図屏風」に見る中世の日吉祭」は、サントリー美術館蔵「日吉山王祭礼図屏風」に描かれた中世の日吉祭の様態を考察したものである。絵画の分析を通じ、日吉祭が湖上のみならず陸上でも執行されていたこと、その場所として唐崎の「南浜」を導き、また、七頭の神馬が神事に重要な役割を果たしていた点を挙げた。さらに近世以降の日吉祭を描いた絵図によって、実際の鳥居や神事が行われる建物の位置や機能を確定した。これらを踏まえ、サントリー本の画面右から左へ移動する民衆が、神事の参拝を目的に急ぐ人々として論証した。また多くの従者を従え「南浜」の祭場に至らんとする一人の武士を、屏風の発注者の候補と捉え、この武士を永禄二年（一五五九）に坂本に半年滞在していた長尾景虎（上杉謙信）と推定した。以上の論は、絵画を通じて制作者の集団や意図が何を表現したのか、その描き方をめぐって議論が展開しており、寺社の景観をどのように信仰の（かたち）として表現するか、という課題に挑戦していく歴史的過程を読み解くものでもあった。

※

※

※

風俗絵画はいったいいくつの顔を持っているのだろうか。飲食、祭礼、役者、美人、農村、都市、寺社、装束——実際には、これら日常のハレとケに取材した主題の裏に、別の主題が隠されているものがほとんどである。

本書に取められた論文から見えてきたものは、通俗的な人気の主題に姿を借りた、より高次元の主題である。そ

れらは信仰、国家安寧、世相風刺、遊里、秘説、演出など、抽象的で内容の直接的な描写が難しいものや、あるいは直接的な表現が社会的に避けられてきたものや、吉祥・幸福のように誰もが好む故に、他の主題と融合し現在では見えなくなってしまう主題もある。

本書に収められた十三本の論文は、執筆者の専門性をベースとして、専門分野以外の方法論を取り込むことによって、今まで見えていなかった風俗絵画のもう一つの顔を、斬新な切り口で明らかにしている。

あらゆる絵画のジャンルの中でも、特に風俗絵画は、人間の感性に強く訴えかける不思議なエネルギーを秘めている。制作当初に持っていた社会的な文脈を離れて、人々の生活の営為が独立した主題となった背景には、長い年月をかけて、あらゆる階層の人々に喜ばれる美の〈かたち〉として醸成されてきた歴史がある。美の〈かたち〉が強烈な印象を放ち、あるいはその一部が定型となって人々の記憶に擦り込まれてきたために、制作当初に〈かたち〉が物語っていたはずの本来の主題を置き去りにしてきたのである。

本書を貫く視点の一つは、美の〈かたち〉に託された制作者の意図や欲求、もしくは制作者自身の姿を、特定の享受者層や注文層を想定しながら、露わにしていくものである。制作者は、風俗絵画が本来担っている、社会秩序を表す鏡としての役割と向き合いながら、享受者層の要求の変化にあわせて、新しい趣向や清新な画風を取り入れてきた。趣向を凝らした美の「演出」は、さらに新しい享受者を獲得して、そこに別の立場から意味や機能を加えられてきた。一方で「信仰」は、メッセージ性の強い〈かたち〉の定型化とその集積を促してきたが、画家たちはそれらの約束事に沿った〈かたち〉を用いながら、そこに様々なレトリックを加えて、美的魅力を現出させてきた。そして、近現代に到るまで「東西」の価値基準が出会い、様々な視線が複雑に交差する中で、その時代の享受者に喜ばれる「メディア」として、風俗絵画を描き続けてきた画家たちの力量を見出すことができるのである。

しかし、風俗絵画の魅力は、そのような絵画としての趣向の面白さだけにとどまらない。絵画資料による分析だけでは不可解な描写を内包するのも大きな魅力である。本書に収められた各論文は、画中のテキストとの関係、日記資料、故事、画家の手記などを手がかりとした探究によって、新しい解釈が切り開かれている。また、当時の人々の生活や観念に近づこうとする、そうした探究の積み重ねによって、意図的に視覚化されていないものの存在にも関心が向けられている。

人間の営為の、ある特定の瞬間の姿を美的に留めた風俗絵画は、実際には、虚実が入り交じる、どこにも存在しない時空間をうつしているのかもしれない。制作された時期と描かれた景観年代が必ずしも重ならず、また、当時の社会制度や観念と一致しない描写も見られるからである。それでも、描かれた事象は、人々が未来に残したかった、〈生〉の瞬間の〈かたち〉であることには変わりはない。

それならば、なぜ過去の事象の中で、正確な知識を持って視覚化されたものと、視覚化すらされなかったものが生じたのか。なぜ、定型化されたものと、想像に任せた視覚化が許されたものが生じたのか——私たちの哲学的思考は、これからも限りなく続くのである。

※

※

※

二〇〇五年夏に風俗絵画研究会が発足して、驚いたことに十年近く経過した。この年月の間に、最初は博士課程の学生であった参加者も、気がつけば大学や美術館、博物館などで中核を担う研究者となっていた。発足当初からのメンバーに加えて、最近では、私たちの十歳年下の若手研究者も参加してくれるようになった。世代を超えて議論が活発にできる環境も、お互いの専門領域から学ぼうとする、しなやかな研究姿勢が発足当初から変わっていないからだと思う。

終わりなき解釈という地平の彼方に、私たちが見出したものは結論ではなく、知の宝庫としての風俗絵画で

あったのかもしれない。風俗絵画は、様々な貴重な人々との出会いを私たちにもたらし、絵画の豊饒な見方を授けてくれた。

二〇〇九年に第一弾、二〇一二年に第二弾の論文集を出版したことに続き、この度の第三弾の出版は、研究会メンバーの長きにわたる情熱の賜物である。執筆者をはじめ、思文閣出版には心より感謝を申し上げたい。

あとがき

編者たちが出会ってから約十年の月日が経つ。本書の研究母体である風俗絵画研究会も初回の開催から十年を迎えようとしている。この間、三冊の論文集を世に出せたのは、「風俗絵画」という一つの研究コミュニケーションを促すテーマを得たことに始まる。そこから美術・歴史・文学・地理・人類学などの分野からのアプローチが生まれ、さらに対象とする時代や国境を超えた絵画・視覚・表象・宗教・哲学などに結びつく文化的な探求心へとつながった。

学際的といえば今や「寄せ集め」に聞こえるかもしれないが、この「寄せ集め」を再構成する学際的情熱と好奇心こそ、今までの私たちを導いてきたのではないかと思う。また、学際的な視点が常識である海外の日本学研究や、海外帰りの日本研究者による問題設定や議論構成は、日本という場で研究する私たちの研究会活動のあり方に大きく影響したのではないか。研究会参加者の国籍や学問的バックグラウンドの違いは、学問の豊かさやその国に生きる信念を教え示してくれていたと思う。そのような底力のある学問に、結論めいた終わりはないのだ、と実感している。

風俗絵画研究会は、二〇〇五年の八月、立命館大学における私立大学学術研究高度化推進事業「オープンリサーチ整備事業」のサブ・プロジェクトとして始まった。二〇〇八年から二〇一二年末まで、文部科学省によるグローバルCOEプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」（立命館大学）の「洛中洛外図屏風の総合的アーカイブと都市風俗の変遷」の研究活動の一環として活動を続け、その後も立命館大学アート・リサーチセンターのご支援を得て活動してきた。本書はその

研究成果の一端をまとめたものである。研究活動の拠点となった同センターの皆様には、心より御礼申し上げたい。また、今まで本研究会に参加して下さった方々、育てて下さった方々の存在なくして、研究が形になることはなかったと思う。今、「あとがき」を書くにあたり、この間に出会った多くの人々に対し、感謝に堪えない気持ちでいる。

三冊目の論集を節目に今後の研究会についても考えていかななくてはならない。研究会の様子については、これまでの「あとがき」に出光さん、彬子女王殿下が書いた通りであるが、年月の経過は研究会の方向性も作り上げてきたと思う。発足当初は若手のそれこそ「寄せ集め」集団でもあったから、方法論の違いが論点や焦点の違いを生むことは理解できても、それを自らの研究に受け入れる方法を知らず「ふーむ、この場を誰がまとめるんだろう」と思ったりもしたが、誰も無理にまとめようとはしなかった。研究会は「すごく大らか」であり、しかし、これが良かったのか次第に互いの目のつけどころが移動し、研究テーマの広がりを主体的に求め合う方向性が生まれてきたと思う。研究会が歩んだ歴史はゆっくりであるが、そろそろ次の新たな展開を促しているのかもしれない。どうだろうか。研究会を通して感じたのは、各研究分野の基本となる考え方や前提となる知識がほぼ通用しないこと、どんな研究に対しても議論を打ち立て、自らの研究の問題関心と結びつきを見つけることができること、そして広い視野と知恵を身につけられること、あとは研究に対する寛容さ、敬意、好奇心であろうか。私にとってこの研究会は、頭の中で果てしない世界に挑む楽しさと、自らの無知を知る苦しさとが混在する修業の場でもあった。研究会活動の意義は引きつづき問い続けていきたい。

『風俗絵画の文化学』Ⅱの編者「あとがき」にもあるように、編者の私たちは、約十年前、大学院生や研究員の立場にある時にロンドンで出会った。異国の地で日本人同士が親しくなるのはよくあ

ることであるが、ロンドンという非日常的な光景も手伝い、私はそこで初めて自分が抱えていた研究や人生に関する大小様々な想いや気持ちを含めそのまま出すことができたと思う。現在も三者三様でそれぞれ別の立場にあっても、彼女らから教わることは多い。研究会を立ち上げる契機にもなった出光さんの「同じ作品をみても、研究の立場によって見方が全然違って、面白いね!」という、包容力のある研究感覚と誠実に対象を見る視線、そして彬子女王殿下の研究會評「何でもありで面白いね!」という、鋭敏な感性と正直で明快な研究姿勢は、何年も前の言葉であっても、今でも私の気持ちを刺激し、牽引し続けてくれる。素直に尊敬でき、また世界の面白さを学問によって追究している人たちだと思ふ。その後も研究会の内外で、多くの出会いに恵まれたが、それらのたくさんさんの恩は、自分の信じた道を実践し伝えることで、少しでもお返しできればと思ふ。

最後に、本書に収録した十三名の論文は、この風俗絵画研究会での研究成果の一部である。研究発表および論文執筆のために多くの時間と労力を惜しみなく割き、力のこもった論文を仕上げてくださった執筆者の皆様には、心より御礼申し上げます。また末筆ながら、活動を長期に亘りご支援くださった立命館大学名誉教授の川嶋將生先生には、私たちの「大らか」さ加減でご迷惑とご心配をおかけし続けていると思ふ。言葉に尽くせない感謝をどう表現したら良いのか、もはやわからないくらいであるが編者を代表し、心より感謝申し上げます。また同様に、本論文集の第一弾の出版からお世話になった思文閣出版、研究会にも参加し出版に御尽力下さった取締役の原宏一氏、編集者として私たちの論集を作り上げて下さった秦三千代氏に、心よりの謝意を表したい。

二〇一四年五月

松本郁代

中野 志保 (なかの・しほ)

1978年生。元離宮二条城事務所学芸員(嘱託職員)。日本近世絵画。「上方浮世絵と北斎——その影響を讀本挿絵と役者絵から検証する——」(『浮世絵芸術』150号, 2005年)「上方『似顔画師』北洲の北斎学習について——相貌から身体へ——」(『美術史』第164冊, 2008年)「讀本挿絵における北斎と上方絵師の交流」(大阪市立美術館編『北斎——風景・美人・奇想——』展図録, 2012年)

宮崎 もも (みやざき・もも)

1978年生。大和文華館学芸部部員。近世日本美術史。「酒井抱一の画業における国学の影響——「五節句図」に注目して」(『美術史』159号, 2005年)「酒井抱一の歌仙絵——抱一のやまと絵学習に注目して」(『美術フォーラム21』29号, 2014年)『大和文華館の物語絵』(大和文華館, 2014年)

館野 まりみ (たての・まりみ)

早稲田大学大学院文学研究科美術史学博士後期課程。日本美術史。「Gentlemen and Courtesans: Themes of *Yūjo* and *Kinkishoga Mitate*», *AGLOS: Journal of Area-Based Global Studies*, vol.2, Sophia University Graduate School of Global Studies, March 2011, (上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科, 2011年) http://www.info.sophia.ac.jp/gsgs/en/online_journal/backnumber.html

吉住 恭子 (よしずみ・きょうこ)

1969年。宮崎県生まれ。京都市歴史資料館員, 京都女子大学非常勤講師。日本文化史。共編著『叢書 京都の史料7・8 京都武鑑』上・下巻(京都市歴史資料館, 2003・2004年) 共著『秦家住宅 京町家の暮らし』(新建新聞社, 2008年)「皇親と賜姓皇親」(『史窓』第58号, 京都女子大学史学会, 2001年) など

松本 直子 (まつもと・なおこ)

1972年生。元離宮二条城事務所学芸員(嘱託職員)。日本近世絵画史。「隣華院改修と狩野永岳——山楽帰帰の意味」(『美術史』158号, 2005年)「二条城——京の城のジレンマ」(同志社大学京都観学研究会編『大学的京都ガイド—こだわりの歩き方』昭和堂, 2012年)「二条城二の丸御殿遠侍障壁画についての一考察」(『文化学年報』62号, 2013年) など

森 道彦 (もり・みちひこ)

1986年生。京都府京都文化博物館学芸員。中・近世絵画史。「〈若一王子縁起絵巻〉と狩野尚信」(『民族芸術』27号, 2011年)「室町期における尊氏甲冑像の受容と肖像画制作: 「大内義興像」(京都府立総合資料館所蔵京都文化博物館管理)の紹介を兼ねて」(『朱雀』第25集, 2013年)「牛馬似絵の意味と機能——中世絵画における畜獣表現と「駿牛図」をめぐる一試論」(『朱雀』第26集, 2014年)

米倉 迪夫 (よねくら・みちお)

1945年生。東京文化財研究所名誉研究員。日本中世絵画史。「源頼朝像——沈黙の肖像画」(平凡社, 1995年)「鎌倉時代風景画への覚え書き——風景とその景観属性をめぐる」(『文学』10-5, 2009年)「掛幅装高僧絵伝の制作目的とその機能——法然上人伝絵の再検討」(佐野みどり・加須屋誠・藤原重雄編『中世絵画のマトリックス II』, 青簡舎, 2014年) など

下坂 守 (しもさか・まもる)

1948年。石川県生まれ。京都国立博物館名誉館員。日本中世史。「中世寺院社会の研究」(思文閣出版, 2001年)「描かれた日本の中世」(法蔵館, 2003年)『京を支配する山法師たち—中世延暦寺の富と力—』(吉川弘文館, 2011年) など

〈収録順〉

◆編者・執筆者紹介◆

松本 郁代 (まつもと・いくよ)

1974年，静岡県生まれ。横浜市立大学准教授。日本文化史。主な論著に『中世王権と即位灌頂』（森話社，2005年，単著），『儀礼の力』（法蔵館，2010年，共編著）『京都イメージ——文化資源と京都文化』（ナカニシヤ出版，2012年，共編著）など

出光佐千子 (いでみつ・さちこ)

1973年，東京都生まれ。青山学院大学准教授。日本絵画史。主な論文に「池大雅筆『西湖春景・銭塘観潮図屏風』の主題考察——図様と文学的典拠を探る」（『MUSEUM』599号，2005年）「池大雅筆『松蔭観潮・夏雲壺峰圖』屏風の主題再考察」（『國華』第1354号，2008年）「池大雅筆『瀟湘八景図』研究——詩画一致の鑑賞方法から——」（『風俗絵画の文化学Ⅱ——虚実をうつす機知』思文閣出版，2012年）など

彬子女王 (あきこじょおう)

1981年，東京都生まれ。慈照寺研修道場美術研究員，立命館大学衣笠総合研究機構客員協力研究員ほか。在外日本美術コレクション研究，文化交流史。主な著書に『文化財の現在 過去・未来』（編著，宮帯出版社，2013年）『写しの力——創造と継承のマトリクス——』（共編著，思文閣出版，2013年）

宮下規久朗 (みやした・きくろう)

1963年，愛知県生まれ。神戸大学大学院人文学研究科教授。西洋美術史・日本近代美術史。主要著書に『カラヴァッジョへの旅——天才画家の光と闇』（角川学芸出版，2007年）『食べる西洋美術史——「最後の晩餐」から読む』（光文社，2007年）『刺青とヌードの美術史——江戸から近代へ』（日本放送出版協会，2008年）など多数

呉 孟 晋 (くれ・もとゆき)

1976年，兵庫県生まれ。京都国立博物館学芸部研究員。中国絵画史。主な論著に『中国近代絵画と日本』展図録（京都国立博物館，2012年，共編）「民国期中国におけるシュルレアリスムの夢と現実」（『現代中国』第83号，2009年）など

中野 慎 之 (なかの・のりゆき)

1985年生。京都府教育庁指導部文化財保護課技師（絵画・彫刻・工芸品担当）。美術史。「昭和大会屏風の史的位罫」（『京都美学美術史学』11，2012年）「京都画壇における鶴派の意義」（『美術史』177，2014年）「新南画の成立と展開」（『鹿島美術研究』年報第31号別冊，2014年）など

倉橋正恵 (くらはし・まさえ)

1974年生。立命館大学衣笠総合研究機構客員研究員。日本芸能文化史。「役者似顔給金付考」（『芸能史研究』152号，2001年）「石塚豊芥子『花江都歌舞妓年代記統編』——近世後期における歌舞伎興行記録の様相——」（『論究日本文学』100号，2014年）「役者評判記における見立評の系譜」（『図説江戸の〈表現〉——浮世絵・文学・芸能——』八木書店，2014年）など

ふうぞくかいが ふんかがく しゆんじ
風俗絵画の文化学Ⅲ——瞬時をうつすフィロソフィー——

2014(平成26)年11月28日発行

定価：本体7,000円(税別)

編者 松本郁代・出光佐千子・彬子女王

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

印刷 亜細亜印刷株式会社
製本

©Printed in Japan

ISBN978-4-7842-1775-5 C3070